

## 地域住民による支え合いの拠点（居場所）づくり（3）

—北翔大学による子ども食堂・地域食堂の取り組みを通して—

Making Places for Mutual Support by Local Resident (3)  
—Through the Practice of “Kodomoshokudou” (Restaurants for Children)  
and Community Restaurants by Hokusho University—

岩 本 希 <sup>1)</sup>	尾 形 良 子 <sup>1)</sup>
IWAMOTO Nozomi	OGATA Ryoko
吉 田 修 大 <sup>1)</sup>	黒 澤 直 子 <sup>1)</sup>
YOSHIDA Takehiro	KUROSAWA Naoko
梶 晴 美 <sup>1)</sup>	本 間 美 幸 <sup>1)</sup>
KAJI Harumi	HOMMA Miyuki
八 卷 貴 穂 <sup>1)</sup>	佐 藤 郁 子 <sup>1)</sup>
YAMAKI Takaho	SATO Ikuko
佐々木 浩 子 <sup>2)</sup>	
SASAKI Hiroko	

### I. はじめに

「子ども食堂」の取り組みは全国で広がりを続けており、2019年のNPO法人「全国子ども食堂支援センター・むすびえ」調査によれば3,718カ所確認されている。前年度は2,286カ所と報告されていたためこの1年で約1,400カ所増えたことになる。

わが国における子ども食堂は2012年に東京都大田区にある「気まぐれ八百屋だんだん」の店主が始めたのをきっかけに、その後一気に広がりを見せた。子どもの貧困対策を目的とする活動団体の他、近年では居場所づくり

をその目的の一つとして活動する団体も少ない。一方、地域食堂については始まりこそ明確ではないものの、「コミュニティ・レストラン」略して「コミレス」という名称を用い世古一穂氏が立ち上げたプロジェクトにより全国に広がったと考えられる。世古(2011)は、コミュニティ・レストランは「地域循環型社会づくり」「コミュニティの再生」「女性の雇用の場づくり」「地域弱者の雇用の場づくり」「不登校児の出口づくりの場」など地域のさまざまな課題をコミュニティ・レストランの実践のプロセスを通して図ろうとしていると述べている。

---

1) 北翔大学生涯スポーツ学部健康福祉学科

2) 北翔大学教育文化学部教育学科

北翔大学研究プロジェクト「支え合いの拠点（居場所）づくりの支援のための研究・実践グループ」（以下、研究・実践グループ）では、江別市内において地域の居場所づくりを展開するべく2017年から「子ども食堂・地域食堂」の取り組み開始している。今後住民主体での居場所づくりが進められるよう、“居場所づくりの支援”として自ら実践するのみならず研修会開催やボランティアとの協働による住民の主体性醸成も目的としている。

本稿は、研究・実践グループによる「子ども食堂・地域食堂」の活動を開始から現在、とりわけ2019年の経過について報告し、今後の課題等について検討することを目的としている。

## Ⅱ. 研究・実践グループの活動経過

### 1. 活動経過概要

研究・実践グループは2017年12月に第1回目の子ども食堂・地域食堂を開催するにあたり、同年4月よりグループ内での協議や全国の実践団体への視察、江別市内各関係機関への協力依頼及び周知等を行った。

同年12月20日に野幌公会堂を会場に第1回を開催してから毎月1回の開催を定例とした。会場を現在の八丁目プラザのつぼに移動した2018年3月以降も毎月第3水曜日に定期開催している。また同年12月には新たに真願寺での子ども食堂・地域食堂も開始し、2か月に1度程度開催している（詳細後述）。他方、プロジェクトメンバーによる定期的な会議、適宜関係機関との打ち合わせや協力依頼等を重ね現在まで活動を継続してきた。表1はプロジェクト立ち上げから現在までの活動

を概略化したものである。

2019年2月には東京都文京区及び札幌市豊平区の実践者を講師として招き、江別における地域づくりについて研修会を開催した。同研修会は、2017年11月に本学を会場とし専門職者向けに開催した研修会を住民向けに再企画したものである。専門職者向け研修会に参加した方の多くが、広く住民にも参加してもらうべき内容であったと感想を述べられ、住民向け開催を企画する運びとなった（詳細後述）。

毎年秋に本学で開催される北翔祭(大学祭)では2018年度から「子ども食堂・地域食堂バザー」を開催し、運営資金の調達を図っている。活動経費には食材費の他、会場費、消耗品費、カフェタイムに提供する菓子類や飲み物など、さらに参加者向け企画で使用する玩具や文具類の購入が含まれる。運営資金の調達は多くの活動団体が課題として挙げるものの一つとなっており、大学内で立ち上げた当団体においても例外ではない。各種関係機関との打ち合わせにかかる移動交通費等は自費であり、経費として計上しきれない出費があることも現状である。

住民主体の居場所づくり支援活動の一つとして、当団体の代表者が市内における住民向け地域活動セミナー講師依頼を受けたことをきっかけに積極的にボランティア参加者を受け入れ始めた。ボランティアとしての参加を通し地域活動の実践力を身に付け、数か月後に独立し団体を立ち上げた方もいる。その後は自ら活動団体を立ち上げる目的ではなく、当団体と協働し活動を支えてくれるボランティア参加者があり、安定した活動につながっている。

また、2018年12月に立ち上がった江別市内で子ども食堂等を運営する団体を対象とした連絡会では、市内で活動する団体の情報共有のためSNSツールLINEを使ったグループトークが活用されている。研究・実践グループが活動を開始した2017年12月現在は、当時活動を休止していた「ここなつ」を除き居場所活動団体（子ども食堂や地域食堂）は0団体であった。しかし、それから2年経過し2019年12月現在は12カ所まで増えている。当時、同グループには視察や相談の電話が多く入り、市民活動の広がりやに微力ながら貢献できたのではないかと考える。

## 2. 子ども食堂・地域食堂☆しんがんじ

江別駅近くの浄土真宗本願寺派 廣間山真願寺にて2018年12月よりおおよそ2か月に1回程度、「北翔大学子ども食堂・地域食堂☆しんがんじ」を開催している。ご住職並びに関係者の方々の協力を得、江別地区でも居場所づくり活動が実現した。お寺等を活用した子ども食堂は全国でも少なくない。農林水産省の調査によれば自団体所有以外の会場を使用する場合に最多の約17%が「宗教法人」（お寺、教会）を使用していると回答している（農林水産省2017年、子供食堂向けアンケート調査）。地域住民にとって親しみのある場所で安心して開催できることが理由の1つとして考えられる。また、お寺は十分な広さや設備が整っていることも運営者にとって活動しやすく利用したい理由となるのではないだろうか。

子ども食堂・地域食堂☆しんがんじの参加者層は八丁目プラザのっぽでの開催とやや異なる。真願寺では学童保育から先生と複数の児童が遊びに来たり、食事タイムが近づくに

つれ子ども連れの母親あるいは両親とともに仲間同士で来場するケースも多い。子どもの参加割合はおおよそ4～5割弱である。一方八丁目プラザのっぽでは成人者の参加が多く、子どもの参加は全体の2割程度である。

真願寺は会場が広く、食堂開催時子どもたちは大学生と元気に遊び、親同士が憩う場としても利用されている。スタッフには本学の学生他、お寺関係者の方々、主任児童委員等活動に賛同してくださる協力者が集まり30名を超える体制で運営している。最近では、八丁目プラザのっぽの常連参加者が真願寺の開催に参加したり、その逆であったりと会場が異なっても参加される方が増えている。参加者の多くは、「大学生と接する機会が貴重で嬉しい」「お話できるのが楽しい」「大学生が子どもと遊んでくれるので助かる」などの感想を述べ、大学生スタッフの存在意義が非常に大きいものと考えられる。大学生は子どもたちにとって親でもなく先生でもないお兄さん、お姉さんというあまり出会ったことのない大人である。子どもの保護者からは「普段かわることのない大学生と接することで知らない人に慣れてくれるのでは」という声もある。真願寺は大変広く、子どもたちはカフェタイムに元気いっぱい走り回る。普段はなかなかできない遊びを大学生とできることが楽しいようで、帰り際に泣き出す子も少なくない。

また小学生くらいの子どもは力もあり、遊び方によっては危険が伴うこともある。大学生はよい遊び相手となりつつも適切な遊び方ができるよう手本となることも求められる。このような活動に大学生が参加することで、さまざまな面におけるコミュニケーションについて学ぶこともでき学生にとっても貴重な



写真1 八丁目プラザのっぽカフェタイム



写真4 同 厨房の様子



写真2 同 食事タイム



写真5 同 開催食事タイム



写真3 眞願寺での開催カフェタイム

経験、場となっていることが言える。

図1は活動開始から現在までの開催(野幌)における参加者数及び目的別推移をグラフ化したものである。2019年度から提供食数を30～35食程度と定めたことで、参加者数は横

ばいとなった。実際には、早い時間帯に売り切れとなるケースが増えているためお断りする機会も増えてしまった。また、以前に比べカフェタイム時間帯から食事タイムまで続けて参加する方が増えたため、食事の時間帯に来る方の断りが増加した傾向にもある。

### 3. 住民向け研修会 「地域の居場所のつくり方」開催

2018年11月に開催した専門職者向け研修会「地域の居場所のつくり方」参加者より、住民向けにも開催してほしいという声が相次いだ。そこで広く住民向けの研修会を同じテーマでありながらより住民が居場所づくりを始めやすいよう再度企画し、開催した。開催概

表1 研究・実践グループ立ち上げから現在まで（概略）

年	月	内容
17	4～7	プロジェクトチーム立ち上げ、助成金の申請、視察計画の検討、大学祭企画検討・準備
	8	全国各地への視察開始、市内関係機関訪問・協力依頼、大学祭準備
	9	同視察（東京都等）、同協力依頼、会議、大学祭（ワンコイン食堂）
	10	同視察（妹背牛町等）、同協力依頼、会議
	11	専門職者向け研修会開催（「地域の居場所のつくり方」 講師：文京区社協浦田氏・こまじいのうち秋元氏、会議
	12	会議、第1回子ども食堂・地域食堂開催（野幌公会堂）
以下、例外のみ記載 ※会議及び子ども食堂・地域食堂（第3水曜日）は毎月開催。		
18	3	文京区社協訪問（活動開始報告）、子ども食堂・地域食堂会場移動（八丁目プラザのっば）
	5	真願寺打ち合わせ、大学祭企画
	6	助成金申請
	7	地域活動セミナー講師（代表）
	7～8	研修会企画検討、大学祭準備
	9	大学祭（バザー）、研修会準備・関係機関訪問及び協力依頼、ボランティア受け入れ開始（以降、随時面談・見学）
	10	真願寺打ち合わせ・広報準備
	12	子ども食堂・地域食堂1周年（定例）、子ども食堂・地域食堂☆しんがんじ第1回開催、研修会準備、江別市子ども食堂活動団体連絡会発足
19	1	研修会準備・広報
	2	住民向け研修会開催（「地域の居場所のつくり方」：講師 文京区社協浦田氏、こまじいのうち秋元氏、地域食堂かば亭井上氏）、子ども食堂・地域食堂☆しんがんじ第2回開催、助成金事業報告会
	5	子ども食堂・地域食堂☆しんがんじ第3回開催、大学祭企画検討
	6	助成金申請
	7	子ども食堂・地域食堂☆しんがんじ第4回開催、大学祭準備
	8	大学祭準備
	9	大学祭（バザー、菓子工房笑くぼ共同出店）、食材寄付協力依頼（JA）
	10	子ども食堂・地域食堂☆しんがんじ第5回開催
	11	JA協力依頼及び打ち合わせ
	12	子ども食堂・地域食堂2周年（定例）、子ども食堂・地域食堂☆しんがんじ第6回開催

要は以下の通りである。

#### <開催概要>

- ・日時 2019年2月9日（土）14時～16時
- ・場所 江別市コミュニティセンター
- ・講師

実践報告1）東京都文京区「こまじいのうち」マスター 秋元康雄 氏

実践報告2）札幌市豊平区「地域食堂かば亭」代表 井上寿枝 氏

講義）文京区社会福祉協議会地域福祉推進

係地域連携ステーション

係長 浦田 愛 氏

- ・後援 江別市、江別市社会福祉協議会
- ・参加者 82名（江別市外からも参加あり）

#### <報告概要>

東京都文京区で“みんなの居場所”として親しまれ、年間4,000人が訪れる「こまじいのうち」は、子どもから高齢者、誰でも集える常設型の居場所である。空き家となっていた秋元氏の親戚宅（東京都駒込地区）を活用



図1 目的別参加者推移

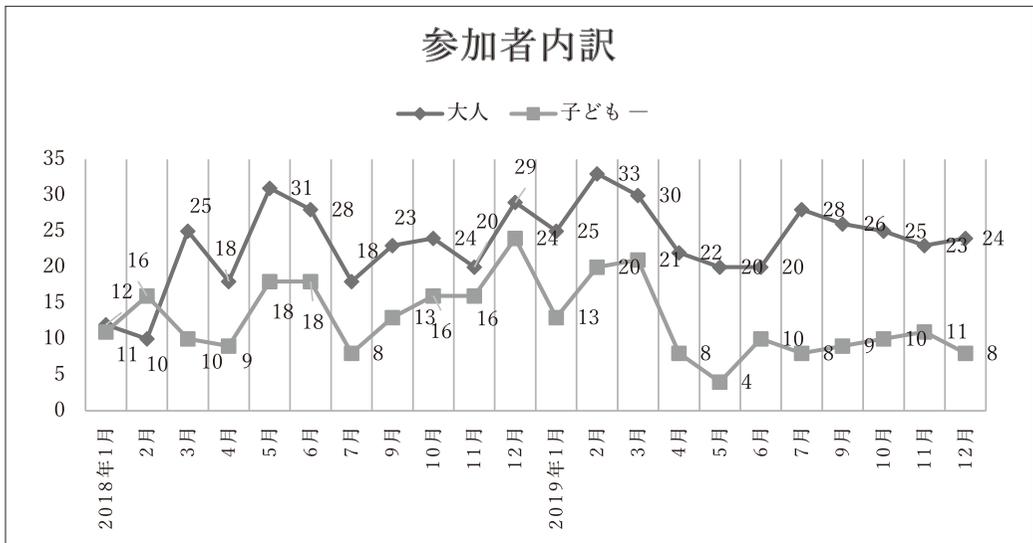


図2 参加者内訳

してほしいと秋元氏が申し出、文京区社会福祉協議会（以下、文京区社協）浦田氏を始め関係者が集まり立ち上げが始まった。2013年10月のオープン以降徐々に軌道に乗り、現在では全国から視察者が訪れる先進的な取り組みとして注目されている。

札幌市豊平区で活動する「地域食堂かば亭」は、月に一度開催する地域食堂を通じた居場所の取り組みである。2016年にNPO法人つながりが主体となり食堂立ち上げに向け企画を

開始し、話し合いや見学を重ねた。翌年2017年に事業を開始し、現在では毎月100名程度の参加者が集まる居場所となっている。「地域食堂かば亭」は経済的困難のみならず孤食や家庭に居づらさを感じる子ども、親たちもほっとできる居場所であることを趣旨として取り組んでいる。

文京区社協浦田氏は、上記2名の実践に触れながらどのように居場所づくりを進めていくかわかりやすく解説した。その中で、サー

ビスや制度につながりづらい「制度の狭間の課題」や「困っていると言えない、言わない、認識がない問題」等について指摘した。また、社会的孤立について「現役時代に活躍した人も今では誰の目にも映らず“透明人間になったみたい”と表現することがある」と専門的知識の有無にかかわらず理解しやすい表現を用い伝えた。

浦田氏によれば、居場所づくりは①単機能の居場所づくり、②中機能の居場所づくり、③多機能の居場所づくりの3段階に分けられる。①から③に移行する中で、徐々に開催頻度や交流機会を増やしていき、常設型、自主的な運営など居場所としての機能を増やしていく流れについて教えた。また、“住民主体の活動”について「住民だけで行うのではなく行政、社協等との協働が重要である」と指摘し講演を終えた。

参加者アンケート（回収率71%）からは「参加して大変よかった・よかった」の合計が96%であり、中には「自分で行ってみたい」、「居場所づくりに参加したい」というコメントも見られた。また、江別市の行政や社協に対し今後期待するという声や居場所づくりを計画立てている方から「大きなヒントを得た」という感想も寄せられた。

研修会には江別市内のみならず道内各地から参加者があり、行政や社協関係者の参加もあった。今後は住民主体の活動を政策面からも支え、協働で地域とりわけ居場所をつくっていくことが求められる。

### Ⅲ. 江別における居場所づくりの展開

#### 1. 広がる居場所づくり

先述のとおり、江別における子ども食堂や地域食堂の取り組みは研究・実践グループが活動を開始した当初は0カ所であった（休止中であったこなつを除く）。同グループの初回開催にも市内専門職等関係機関や居場所づくりを計画している方の視察も多く、当時から居場所づくりに関心を持つ方は少なくなかったのではないかと推察する。

その後徐々に食堂事業を中心に法人内で居場所づくりを開始したり団体を立ち上げるなどの動きが活発化していった。2019年12月現在は12カ所が活動を行っており、その形態や開催頻度もさまざまである。それぞれの特徴を生かした活動を展開し、参加者の中には市内複数の居場所を訪れ幅広く交流を楽しむ者もある。

#### 2. 実践の紹介 「地域ふれあい食堂」

「いずみのPTCA地域ふれあい食堂」は江別市立いずみ野小学校PTCAお父さんの会が主催する活動である。PTCAの“C”とはコミュニティを指しており、いずみ野小学校の児童と地域住民が交流できる場をつくることが目的である。代表の川口氏に立ち上げの思いや実践内容などお話を伺った。

##### <開催概要>

開設日	2018年9月
開催頻度	不定期（1～2か月に1回）
会場	いずみ野／対雁 自治会館
主催	いずみ野PTCAお父さんの会

活動開始の動機を「地域に子どもたちを育ててもらいたくて、地域食堂をやりたいと思った」と話す。いずみ野小学校区内2カ所の



写真6 ふれあい食堂 遊びの時間



写真7 ふれあい食堂 食事の様子

自治会館を借り開催し、「地域の人たちが仲良くなってくれたら」と思いを語った。

同活動は川口氏夫妻を中心に、参加する児童の保護者が一部協力し行われている。毎回30名程度の児童と5～6名の大人が参加している。15時の開場とともに続々と子どもたちが集まり、用意されたアナログゲームやけん玉、トランプゲームなどで遊び始めた。子ども同士のみならず、大人も一緒に遊ぶことで世代を超えた交流が生まれる。参加費は中学生以上250円、小学生及び65歳以上は100円、幼児は無料となっており食事は毎回カレーをふるまっている。申し込み式となっており、事前に小学校で配布される案内兼申込用紙に記入し担任の先生に提出するシステムが取り入れられている。同案内は回覧板でも周知されている。PTCAが主催していること、信頼できる組織から案内が配布されることなど参加する児童や地域の方々にとって安心できる要素が整っており、子どもだけでも参加しやすい環境が作られているように考えられる。開催日には学校長も会場に足を運び、活動を支えている。

多くの団体が課題として挙げる運営費については、会場費が無料であることや農家を営

む友人やスーパーからの食材協力もあり苦慮していないと話す。とくにスーパーなど企業の協力については、情報が共有できれば他の団体も活用できるかもしれない。居場所づくりを始める際の不安として運営費は常に上位に位置しているが、その点も含め誰でも居場所づくりを始められる仕組みは重要である。現在LINEのグループトークを活用し、市内の実践者が情報や食材を共有する仕組みが僅かながら出来上がりつつある。このつながりをさらに有効に活用することができれば、新規参加者もさらに増えるのではないだろうか。

川口氏は「新たに立ち上げる方が知りたい情報を整理してはどうか」と市内における活動の広まりに積極的であり、江別市の居場所づくりを代表する実践者の一人として今後も活躍が期待される。

#### IV. 成果と今後の課題

##### 1. 居場所づくり支援の成果

江別市内において居場所づくりを行う団体が増えたことは何よりもの成果と言える。研究・実践グループが行う活動も2カ所目を開設し、より多くの市民が参加するようになった

た。また、食堂を訪れることで出会った者同士が日常において顔を合わせ声をかける場面もあるようで、開催頻度は少なくとも“つながりを作る”ことには貢献できていると考える。江別市内に限らず多くの実践者が課題に挙げる「男性参加者が少ない」という点に対しては、とくに高齢男性が顕著である。しかし徐々にではあるが夫婦での参加や高齢男性が一人で足を運ばれるケースも増えており、今後はいかに継続して参加してもらえるかを検討する必要がある。

また、研究・実践グループにはボランティアで参加を申し出る方も増えている。実践団体の立ち上げは難しくも、このように既に実践している活動に参加することで居場所づくりに関わる方法もある。実践者が増えることで活動に触れる機会も増え、住民の意識変容や参加の促進がなされることは確かである。今後もボランティア参加者を含め実践に関わる住民が増えることが予想される。

さらに、徐々に活動に賛同される企業も増えてきたことは大いなる成果である。住民主体の活動は行政や社協との協働のみならず、企業からの協力も得られて成り立つものであると考える。誰でも始めやすい居場所づくりには協力者の存在は欠かせない。企業から食材や物品の協力を得られれば、運営資金負担の軽減にもつながる。また、企業も含めより多くの方がそこに関わるからこそ“協働”の理想形であると考え。今後もより広く企業等に働きかけ、活動への理解促進を図り協力を得られる体制を構築することが望まれる。

## 2. 今後の課題

人材確保、活動資金、地域連携については

前稿でも述べ、継続的な課題として挙げられる。さらに、今後は誰でも気軽に始められる居場所づくりの方法について検討する必要があると考える。居場所づくりに限らず、新たな活動を開始するには多くの壁が存在するものである。幸いにして江別市は現在居場所づくり実践者が増え、情報共有できるツールもできた。しかし実践を開始するには「場所」と「資金」が必要である。協力者もなければ、継続は難しい。食堂事業に関しては市内にフードバンクのような機能も作られることで、豊富な食材を有効に活用することができる。

日本では多大な食品ロスも問題視されている。原田(2018)は「食べ物は人と人を繋ぐ大きな力を内在している。食べ物をまちづくりに活用している例はとても多い。その食べ物に食品ロスを用い、地域の繋がりをより強固にし活性化に繋がり食品ロスも削減できる」と述べており、フードバンク等を活用すれば地域のつながり作りとともに食品ロス削減にも期待できる。今後は情報共有のみならず、誰でも始められる仕組みづくりとして行政や各種企業とのより強固な連携及び協力体制が必要であると考え。

## V. まとめ

江別市においてはこの2年間で急速に居場所づくりが進められ、市内数カ所でその取り組みが展開している。多くの住民が“居場所の必要性”を考え、子どもに限らず誰でも寄り添える関係性を構築することは重要な地域課題の一つである。これらを実現する可能性として「子ども食堂」や「地域食堂」に持てる期待は大きい。七星(2019)は「『子ども

食堂』は生活の場にあった『互いの存在のかけがえのなさを感じる関係』を、家族と関係の深い『食』を通じて家族の外に作ろうとしている」と述べ、子ども食堂と居場所の関係について検討した。また志賀(2019)も「地域社会の変化の見通しは高齢者の一人暮らしの増加や(特に東京での)家族や地域の支えの弱さを指摘しており、そうしたものと子ども食堂は関係している」としたうえで、「子ども食堂を積極的に社会資源化し意識的に制度と関連付けるなど活用しながら多くの地域住民を巻き込んでいくことは一つの戦略となりうる」と、食堂事業の可能性について述べている(同)。また、「子ども食堂が人のつながりを形成し維持する役割を果たす『地域の拠点』となる可能性がある」(志賀:同)とも述べ、子ども食堂が果たす機能への可能性を指摘している。徐々に居場所づくりの必要性と子ども食堂・地域食堂の関係性が研究者からも注目され始め、その有する機能や可能性にも期待されているといえる。

「子ども食堂」「地域食堂」の定義は明確ではないものの、その重要性や要素はおおよそ共通の認識が持たれているのではないかと考える。研究・実践グループでも“歩いて行ける場所に複数の居場所”が作られることを目指しているし、常設型の居場所が必要であると考えてきた。しかし、月に数回であっても市内に広がる複数の取り組みが、そこに通う人たちにとっての“居場所”として機能しているのならば、その形はさまざまであってよいと考えを新たにしている。長田(2016)は著書『場づくりの教科書』において、「居場所というのは建物というよりむしろ人間関係だということです」「そこが吹きさらしの野

原でも、オンボロな古い施設でも、自分を認めてくれる人たちがいて、安心感を得ることができれば、そこは居場所になり得ます」と綴っている。常設ではなくても、“いつも決まった日時に行けば会える場”があるという安心感が心の拠り所になり得る。それが現代必要とされる居場所の在り方なのではないだろうか。特別な場ではなく、日常生活に自然と存在している家族のようなものとして、これからも広がり続けてほしいと願う。そのために研究・実践グループとして支え合いの拠点(居場所)づくりの支援を発展させるべく、今後も子ども食堂・地域食堂の活動を続けながら居場所づくりの方法を整理し地域の連携強化についても継続的に検討していきたい。

## 謝 辞

研究・実践グループの活動において、ご理解・ご協力いただいている各関係機関及び団体、住民の皆様は心より感謝申し上げます。

## 参考・引用文献

- 1) 農林水産省：子供食堂と連携した地域における食育の推進，農林水産省ホームページ。(2019年12月25日参照)  
<https://www.maff.go.jp/j/syokuiku/kodomosyokudo.html>
- 2) 原田佳子：わが国のフードバンク活動と地域活性，第10回地域活性学会論文集，第10巻，2018。
- 3) 長田英史：場づくりの教科書，芸術新聞社，2016。
- 4) 七星純子：「子ども食堂」と「いばしょ」

- 論, 千葉大学大学院人文公共学府研究プロジェクト報告書, 第345集, 13-28, 2019.
- 5) 志賀文哉: “食堂活動”の可能性, 富山大学人間発達科学部紀要, 第12巻, 第2号, 123-128, 2018.
- 6) 志賀文哉: こども食堂の展開とソーシャルワークの役割および地域社会における意味について, とやま発達福祉学年報, 第10巻, 13-20, 2019.
- 7) 世古一穂: コミュニティ・レストラン, 日本評論社, 2011.

